

# ラポール Rapport

Asahikawa Kosei Hospital 



健康と  
信頼の  
未来へ——。

2024  
3

## 退任のご挨拶

この度、2024年3月31日をもって定年のため旭川厚生病院の院長を退任する運びとなりました。旭川厚生病院には1994年4月、南副院長(当時)の熱心な招請を受け、9年ぶりに主任医長として戻り、当時の厚生病院は築6年と新しく、夫婦共に旭川出身という事もあり、何の憂いもなく泌尿器科医としてのびのびと仕事をさせていただきました。泌尿器系のがん(特に前立腺がん)の治療を中心に泌尿器科のレベルアップに邁進した日々が懐かしく思えます。

2014年に前任の柴田院長が体調不良を理由に任期を残して退任されたため、予期していない形で院長を引き継ぐことになりましたが、歴代の先輩たちが築いてきた「地域住民・医療・介護施設に信頼され選ばれる病院作り」を継承し、事件・事故の発生のない、患者・職員にとって安心・安全な病院を作ることを目標に今日まで尽力して参りました。

誌面でもお話しさせていただきましたが、当院の柱は小児、周産期、がん治療です。特に「がん治療」に関しては低侵襲手術のためにロボット支援手術を導入し、道北地方では初めてその適応を泌尿器科、婦人科、外科、呼吸器外科へと拡大してきました。また、心臓血管カテーテル治療も更なる柱に育てるべく専門のセンターを新設しており、今後も地域の皆さまへ信頼に足る医療提供ができる急性期病院としてあり続けることを私も期待しております。

院長として10年間、何とか病院運営を続けてこられたのは、長きにわたり地域の皆さまをはじめ、近隣の先生方に支えていただいた結果だと感謝しています。本当に有難うございます。特に、2020年の新型コロナウイルスによる院内感染発生時には、多くの皆さまにご迷惑とご心配をおかけした事、重ねてお詫び申し上げます。その後の変わらぬご支援と激励により、何とか病院運営を平常に戻すことができました。

4月からは、光部兼六郎新院長を中心とした体制がスタートします。今後におきましても、当院を温かく見守っていただきまして、引き続きのご支援、ご協力を宜しくお願いいたします。

旭川厚生病院 院長 森 達也

ラポール  
Rapport  
Asahikawa Kosei Hospital

J A 北海道厚生連 旭川厚生病院 [旭川厚生病院 検索](#)

〒078-8211 北海道旭川市1条通24丁目111-3 TEL.0166-33-7171 FAX.0166-33-6075

「Rapport (ラポール)」とは、フランス語で「つながり」「架け橋」、心理学用語で「信頼関係」を意味する言葉です。本誌は、旭川市のシンボル「旭橋」のように地域の皆様と当院がつながり、信頼関係を築けるような広報誌を目指します。

取材・編集 / 東洋株式会社 旭川支店



旭川厚生病院  
ホームページ



Instagram  
アカウント名  
asahikawakosei\_hospital

院長

森 達也

Tatsuya Mori

特別対談

院長代理

光部 兼六郎

Kenrokuro Mitsube



—— 森先生の院長キャリアの中で印象深いエピソードをお聞かせください

**森院長** やはり新型コロナウイルス感染症の大規模クラスター（集団感染）です。それが10年間院長を務めてきた中で一番衝撃的でした。まず、発生した時点で、職員・患者さんともに信じられないような感染者数でした。当時はまだ新型コロナウイルス感染症がどういふものなのか、漠然とした不安がありました。できる限り対策を行いました。が、感染に弱い方は亡くなった方もいらっしやいます。また、職員自身も不安だったと思いますし、クラスターの1週間から10日はかなりきつい状態でした。

特に最初の感染の把握から対応策ができるまでの、現場は大変だったと思います。報告が来るたびに感染者が増えていき、一時は日本でも最も感染者を擁する病院になってしまいました。

—— マスコミの取材対応なども経験しましたし、院内外の多方面で早急な対応に追われました。

—— そうした経験の中で、大切だと思ったことは何かありましたか

**森院長** 目指すべき指針がないと、これは一体どこが終わりなのか・・・という不安で悪循環に陥ってしまいます。職員自体の目標がはっきりと見えるまでが大変でした。

クラスター時の感染対策は専門家に意見を伺い、段階的に強化していくのですが、それが全体にうまく伝わらないと機能しません。どう対応すればいいのかきちんと方向性が定まり、職員にはつきりと伝わったときから事態が好転したと思います。伝えるということ、理解してもらうということがまず重要だと痛感しました。

—— 光部先生はコロナ禍のときにご苦労されたことがありますか

**光部院長代理** 産科・周産期医療で特に緊急的な対応が必要でした。当時は年間700件以上の分娩がありました。病院機能停止が決定された瞬間から当院では手術や分娩が一切出来なくなっていました。

そのため、その夜のうちに旭川市内の分娩取り扱い施設に通院中の妊婦さんを引き受けていただく仕組みを作る必要がありました。最終的に270人の妊婦さんを受け入れていただくことになり、市内の産婦人科・周産期施設の皆さまには心より感謝しております。

—— その中で、特に印象に残ったことなどはありますか

**光部院長代理** 私は大規模クラスターによる病院閉鎖から再稼働する際の仕



最も信頼され選ばれる病院を目指し、多様化する医療・福祉などのニーズに日々対応している旭川厚生病院。総合周産期母子医療センター、地域がん診療連携拠点病院としての機能を備え、近年では地域医療支援病院に指定されたほか、病院機能評価機構の認定など多くの施設認定を受けている。

2014年就任以来、多くの功績を残してきた森達也院長と、次期院長に就任する光部院長代理から、今後の旭川厚生病院の方向性や考えなどをインタビューした。

事をさせていただきました。病院はおよそ2か月間閉鎖されていたのですが、閉鎖1か月後にまず周産期センターに限定して業務を再開しました。

道北地域でハイリスク妊娠分娩管理が可能な医療機関は当院と旭川医大病院の2カ所しかなく、地域の要請として周産期機能の早期再開が必要だったのです。

続いて病院全体の再稼働が必要となりましたが、病院を再開するためのノウハウが無かったため、先行した周産期センター再開時の仕組みや経験を応用して病院の再稼働に取り組みました。

多職種によるワーキンググループを複数編成して同時進行で作業を進めていきましたが、その時に感じたのが、「人の力」というのはものすごいなということでした。

旭川厚生病院には医師、看護師、コメディカル、事務など約千人の専門職員がいます。今回の新型コロナウイルス感染症による病院閉鎖は今までに経験したことがない大きな出来事でしたが、明確な目標を設定し、そこに適切な人材を集めてチームを作り対応していくことにより、驚くほどの効率で病院の再稼働に向けた作業を進めることができました。

旭川厚生病院が患者さんへより良い医療を提供するために、今後はどのような取り組みや視点が重要だと考えますか

森院長 まず一つは当院の理念である「患者さんに信頼され選ばれる病院」を目指し続ける、ということがあります。例えば、病院の技術力をさらに高め、患者さんにとって侵襲の少ない最先端の医療技術・方法を取り入れていくなどが挙げられます。

そして、救急に力を入れ



## 自己変革が問われる時代へ――

略歴

- 院長 森 達也
- ・1982年 北海道大学医学部卒業
  - ・1982年～ 北海道大学病院・市立小樽病院 他 泌尿器科領域の診療を歴任
  - ・1994年 旭川厚生病院 泌尿器科主任医長
  - ・1999年 旭川厚生病院 泌尿器科主任部長
  - ・2011年 旭川厚生病院 副院長・人工透析センター長
  - ・2014年 旭川厚生病院 院長
  - 現在に至る

現在の医療現場における変化や課題について、特に重要視している点はあるですか

森院長 課題といえますが、すでに医療全般に影響が及んでいる事柄ですが、少子高齢化になり、より高齢の患者さんが増えてきています。昔だと高齢を理由に手術しなかった病状でも手術をすることが増えるなどの変化が見られます。

旭川市の人口動態、年齢層の変化を見据えた診療方法や病院機能を継続的に模索する必要があります。今までと同じような診療の仕方だけでは立ち行かなくなるでしょう。また、同時に働く人も足りなくなってきました。既に看護師不足も問題となってきましたので、病院全体で効率的な運営にフォーカスする事で今後も上川地域への医療提供ができるものと考えます。

旭川市の人口動態、年齢層の変化を見据えた診療方法や病院機能を継続的に模索する必要があります。今までと同じような診療の仕方だけでは立ち行かなくなるでしょう。また、同時に働く人も足りなくなってきました。既に看護師不足も問題となってきましたので、病院全体で効率的な運営にフォーカスする事で今後も上川地域への医療提供ができるものと考えます。

旭川市の人口動態、年齢層の変化を見据えた診療方法や病院機能を継続的に模索する必要があります。今までと同じような診療の仕方だけでは立ち行かなくなるでしょう。また、同時に働く人も足りなくなってきました。既に看護師不足も問題となってきましたので、病院全体で効率的な運営にフォーカスする事で今後も上川地域への医療提供ができるものと考えます。

「断らない医療」の実現を目指すことです。100%というわけにはいきませんが、救急の依頼を極力受け入れていくことが必要だと思っています。患者さんにとって優しい治療が出来ればと常に考えていますし、優しい病院でありたいな、と思います。お叱りを受ける事もあります。当院のスタッフは皆さん優しいと思いますよ(笑)。

光部院長代理 私も森院長と同じで、患者さんにより良い医療を提供していくためには、医師、看護師など「人」が大事だと思います。患者さんへ良い医療サービスを提供できる研鑽を積んだ医師、スタッフが大勢いるということでは絶対に重要で、そういういった職員をこれからもきちんと確保・育成していくことが大切です。

設備などのハードウェアについては、常に最新のものを取り入れるのは多少難しい面もありますが、将来的な医療機能の変化を見据え、優先順位をつけて集中的に必要な医療体制、医療設備を整えていきたいと思っています。

いま問題になっている子供の虐待への対応なども含めて、患者さんの社会的側面を支える仕組みが整っており、他にも緩和ケア医療について、多職種からなるチームを組んで対応しており、外来から入院まで包括的にがん患者さんを支える体制がしっかりしている点も当院の強みの一つだと思います。



## 「人」の育成が優しい医療に繋がる――

略歴

- 院長代理 光部 兼六郎
- ・1992年 北海道大学医学部卒業
  - ・1992年～ 網走厚生病院・北海道大学病院 他 産婦人科領域の診療を歴任
  - ・2010年 旭川厚生病院 産婦人科部長・産婦人科主任部長
  - ・2017年 旭川厚生病院 診療部長
  - ・2019年 旭川厚生病院 副院長
  - ・2019年 周産期母子医療センター長・産婦人科主任部長
  - ・2023年 旭川厚生病院 院長代理
  - 周産期母子医療センター長・医療支援部長・産婦人科主任部長
  - 現在に至る



# 地域に寄り添った 病院であり続けるために――

光部先生、森先生のお言葉を受けていかがでしょうか

での試みだそうですね。今後も旭川市と連携し、市民のためになることを病院として取り組んでいきたいと思えます。

最後に、森先生から院長交代にあたり、お言葉をいただいておりますか

森院長 光部先生には一番大変なときに院長を引き受けていただくことになりました。先ほども話に出ました医療者の「働き方改革」もそうですし、漠然とした情勢の中で物事を進めていくというのは大変だと思えます。しかし、新型コロナウイルスで病院閉鎖から再開するまでの取り組みを小委員会から全体まで広げていった手腕がありますので期待しています。

光部院長代理 森院長は10年にわたり要職を務め、この大きな組織をまとめ上げられました。これまでの院長のご尽力に心から感謝いたします。十分な能力を持ち、訓練を受けた優秀な人材がたくさんいることが当院の強みであり、私の最大の任務は彼らに正しい目標を設定することであると考えています。また、医師や看護師、コメディカル、その他病院スタッフの自己評価を高めることも重要と思っております。自らの業績に正しい自信を持ち、自身が所属する病院に誇りを持つことで、これからも患者さまや地域の医療機関の皆さまにより優れた医療サービスを提供できると信じています。



森院長 そうですね。そういった当院で行っている医療や取り組みをもっと発信して知ってもらうことも必要かつ重要だと思います。

この広報誌ラポールの発刊もそうですし、ホームページの情報発信や、医療関係者向けの講演として「地域連携の集い」などを実施したり・・・様々な方法で、旭川厚生病院はこういうことをやっている、ということとをまず知ってもらうことをまず知ってもらおうこと。また、地域の病院にご挨拶をかねて訪問し、顔の見える関係性を築いていく活動も、連携を強めていくうえで重要だと思います。

光部院長代理 患者さんの受け入れについては、より紹介しやすく、お断りしない病院を目指したいと思っています。

当院は高度急性期病院であり、高難易度の治療や手術を行って、地域の医療機関にお返しするというポジションの病院です。関連医

療施設の皆さまとは緊密に情報を交換し、患者さんにとって一番いい選択肢になれる病院を目指しつづけています。

また最近、子宮頸がんに対するHPVワクチン接種が旭川市と連携する機会がありました。HPVワクチンは適切な時期に接種すると子宮頸がんの8割以上が予防可能で、例えば先行するオーストラリアではまもなく子宮頸がんという病気はほぼ無くなるとされています。子宮頸がんは若い人に起る病気なので「マザーキラー」と言われており、日本では年間約3千人の女性が亡くなっています。これは日本全国の年間交通事故死者数より多いのです。

当院では旭川市と協力して旭川市民に対する大規模な集団接種事業を今年1月末に行いました。一般市民を対象としたHPVワクチンの大規模接種という取り組みは日本で初め